



東海道五十三次 一知られざる穴場— その⑭

戻って進むと、「これより石部宿（51 番目）」の道路標示。その後、順に「石部宿御高札場」跡、石部宿を示すモニュメント、「石部宿問屋場」跡、「石部本陣」跡碑、「石部宿茶屋」跡と続く。茶屋跡を右折してすぐ左折すれば、「一里塚」跡、「西口」跡を通り JR 石部駅前。



（歌川広重 石部宿）

少し先で道が2つに分かれていて、左折すれば上道、直進すれば下道。両道に挟まれて「金山」跡を示す裸山。融通の利かない堅物を「石部金

吉」という、その出自になった石部の金山である。上道と下道は名神高速道を潜って合流し、1本になる。この辺りから右手に俵藤太の大ムカデ退治の伝説で知られる三上山、通称近江富士が見えてくる。

さらに進むと、右側に道標「新善光寺道 是より1町余」とある。続いて地藏堂があって、入口に「国寶 地藏尊」の立派な碑。やがて左側に豪華な建物が。建物の前に、「史蹟 旧和中散本舗」の石柱。古くは家康の腹痛を直したと伝えられる「ぜさいや本舗」であった建物で、茶屋本陣にもなった。この辺りは石部宿と草津宿の間の宿として栄えた所。「間の宿 六地藏一里塚」跡、「東海道すすめ茶屋」跡、「九代将軍足利義尚公鈎の陣所ゆかりの地」を過ぎ、「東海道やせうま坂」の道標のあるT字の道を右折し、栗東市内の「目川一里塚」跡、「老牛馬養生所」跡を過

ぎ、1号線の上を越え草津川の橋を渡って右折すると、そこはもう草津宿（52番目）の入口。



（歌川広重 草津宿）

道の左に横町道標、「左東海道いせ道 右金勝寺、志がらき道」とある。この道を下りて行くと突き当たる。ここが東海道と中山道の追分。「右東海道いせみち 左中仙道美のち」と彫られた、高さ4メートルほどの常夜灯の石造道標がある。この右左は京からの基準で、京を目指す私の場合、東海道は逆に左折。左折する前に右、中山道の方を見るとすぐの所にトンネル。上がここも天井川になっていて草津川。

左折して進むとすぐ、「草津歴史街道中山道」と「草津歴史街道東海道」の2つの案内図板があり、続いて国指定の「史跡草津本陣」。その規模は日本最大級と言われていて、一般公開されている。大名が使った上段の間や、家老などのための「向上段の間」、台所、土間、庭園などをデジカメに収めた。展示されている大福帳には、後に2派に割れて殺し合った新撰組の土方歳三や伊藤甲子太郎の名前もあった。少し先には草津宿脇本陣跡が、今でも同名のお食事処として残っていた。次いで草津・矢倉地区の氏神である立木神社。矢倉橋を渡って少し行くと道標があり、「右やばせ道古連より廿五丁大津船わ多し」と刻まれている。矢倉橋の渡しに出る道である。「急がばまわれ

瀬田の唐橋」という俚諺通り、大津までのこの航路はわずか一里余ながら比良嵐が吹いたりして、相当危険を伴った由。この矢倉の地は昔は立場で、広重の「草津・名物立場」に描かれている「名物うばがもちや」があった場所。広重の絵にはお店の右端の軒下に、描き込まれている。現在は草津宿に入る前に横切った、1号線沿いに引越してしまったとのことで立ち寄りずじまい。

「野路一里塚」跡、「野路・萩の玉川」跡の間にある民家の入口に、「清宗塚」の説明板。それによると、文治元年3月（1185）の壇ノ浦の戦いで平氏を破った源義経は、平氏の総大将宗盛と長男清宗を捕虜とし、鎌倉の頼朝の所へ連れて行くが追い返され、仕方なく京へ上る途中、野洲篠原にて宗盛の首を刎ね、ここにて清宗の首を刎ねたという。時に宗盛39歳、清宗17歳。民家ながら勝手に入っていくことが出来、塚の前で手を合わせて来た。

さらに進んで月輪池の前に出ると、「東海道立場跡」碑。その先の「一里塚跡」碑の説明板に、大津教育委員会とあり、いつの間にか大津市に入っていたらしい。さらに進むと、「左旧東海道 右瀬田唐橋」のモダンな造形の碑が建っていた。

いよいよ瀬田の唐橋。「唐橋を制するものは天下を制する」と言われたほどの軍事、交通の要衝であった。現在の橋も昔のデザインを引き継いだ設計がなされている。瀬田川の中州を挟んで大小2つの橋からなり、大橋175メートル小橋50メートル、全長350メートルにも及ぶ。渡り終わるといよいよ最後の宿場である大津宿（53番目）。

直進し最初の信号を右折。JR石山駅を左側に見て進むうちに左、右また左、右とカーブが続

き、次いで左に急カーブする所が膳所城勢田口総門跡。



(歌川広重 大津宿)

次の膳所城北総門跡まで城下町らしく道が幾度も曲がり、そのたびに京阪電鉄の踏切りを越すことになる。

北総門跡のすぐ前方に義仲寺が見えて来る。この小さな小さなお寺に、遺言によって芭蕉が、木曾義仲や巴御前とともに眠っている。判官（義経）鼻眞は世にゴマンといても旭将軍（義仲）鼻眞は芭蕉ぐらいか。その先の右手奥が石場の渡し跡。草津の矢橋の渡しまでの一里余の航路。さらに進むと道の左側に、「此附近露国皇太子遭難之地」の碑が建っていた。当時の超大国帝政ロシアのニコライ皇太子が大津訪問中、警備の巡查津田三蔵に斬りつけられて負傷、国中を激震が走った事件。富岡多恵子の『湖の南』（新潮社）に詳しい。

ここを過ぎると札の辻跡。かつての大津宿の中心。左折してすぐのところに大津本陣跡。さらに400メートルほど進むと蟬丸神社下社。境内に入るにはまたも京阪電鉄の踏切。1号線に合流して右に蟬丸神社上社。その先にも村社蟬丸神社があり、3つ目。頂上付近に、「逢坂山関址」碑と寛政6年建立の常夜灯。その先には「走り井餅屋跡」碑や月心寺。月心寺境内には名水走り井と、「大津絵の筆のはじめは何仏」の芭蕉句碑。広重

も「大津・走井茶屋」で、この名水で作った餅を売る店を描いている。月心寺から20分ほどで山科追分、伏見道との分岐点。さらに500メートルほど先に小関越の追分、三井寺観音道との分岐点。

その先、JR山科駅を右に見て直進。この辺から東海道は三条通りの名を語っている。

まもなく「史跡五条別れ道道標」、右へ三条通、左へ五条通と刻んである。ほどなく冠木門の見てきた所で広い三条通と別れて一方通行の狭い道へ入るのが東海道。日ノ岡峠を越す手前に旅人が喉をうるおした「亀の井」がある。この峠を上りきった所で先ほどの広い三条通と合流。すぐ歩道橋があって向こう側（右側）のお地藏さんの鎮座まします所が刑場跡。その先の大橋の近くに、「三条通 東大津道」の道標。東とは今歩いて来た道。

終点三条大橋着。渡る手前の右側に見落とされがちな、「駅伝の歴史ここに始まる」の碑。渡り終えた左側には弥次喜多像が旅姿で建っており、右側には豆菓子、あられ専門の老舗「船はしや」。手間と時間をかけて作られる彩り美しい五色豆は京土産に最適。



(歌川広重 三条大橋)